



15
1576
2



門 15
號 1576
卷 2

冊 二
號 九
三

聖澤雜誌卷之三

柳里恭草稿



あまふ茶を論ひありとのふことと利休子同ひし附
こら友子ノ世といふその何り己色と茶不招きしとき時刻と遠
たふ又とていり刻限残たふずして行きまふ子内ある溜り戸
此あまふと穿ま上子筆のこを敷くあまふ土とまきり
はんかくそのまふのりてかんまふおま地乃土くえて穴子
たり穴乃底子土のぬ里たふが中へまこまこれがこりあは湯
て再びかりまると今との興うこり此まふぬて朝明とま老上
おはさばくとまやくおまふれまふまふまのこまろはるひま
ねて知りまるとて穴子底まふまふまふまふまふまふまふまふ

おさふ赤とありつて落つるぬねこそそれ日の奥とを好くしり葉のひ
たす子へ流るふごもあつねと夜まごそ子忘せされば葉のなり
あつねといもまし

○
秋野意仙といふ医師豊存の玉より赤子出て一休禪師此ゆ
なひあづく大庵も小居しころ料理の才兼子此方子とこそあつねあ
るまを付しりし禪師子あつねせらるあめ慈悲後救急ありし葉
の事子つりしころが禪師常小化より物とありしりし付ハ獲取の
このと一ツ益子あつねへし合しあつねとて又て何とそ料理乃潤
ゆれとまやう小寺トふしりあつねとそが禪師しりしりし邪心ハ一
ぬあり飲食も色善と悪と好しどこのまつに意仙といふけり
しりしりしりし禪師もあつねあつねしりしりしハ意仙といふけり

ちり調味のおまがよろしきぞとヤルまどその好ハ左もあつねあつね
しりしり

○
東野お佐川田森六がめと今日の内書搦子雪のよとあまきをを
ろきねとあつね返事子

○
暇常あつねゆとを昌後り八月本とのと格あ子めりゆれと
雪ハさふどふりしと不中かんもあつねきとれを空が雪あ
きまあつねハ吹雪ありあつねとてこえ死ぬるわの多
とあれハ悦びむとるあつねハあつねすハ東野の猿子由井とい
つすくに霜りし秋をいめて雪乃降乃まよめり

○
あつね子ハ何れも葉根のよと山誰か後嶺乃雪あつね
あつね乃後松といふ子初りし時家にあつね此中あつねのころよ

あつて一に渡りつゝあつて朱は是よりさへも知る人ありて江
の出入の孔と京丸の牡丹とを控あつてふ一孔は人を
かきつてありてこの地もいつまでこの地はあつて後人尋ねたま
てはさう人子とて舟筏も通はざる地ふとて人の用形もさ
ろれりこころ四五折の事ある中子長も又あるかの事やも院
をきて伝説と無うりそれ南極ハ一向京の志る光明の弥陀子ひ
しき大つあつてこのあつて食料の事と供へおとともとて光明を
とて手向るとありておち燈火あつて炬よりて業と形をう土人の
も子想数ありて男女も子おちて一盤ハ獲りてまきとて子供
も皆想数ありて衣類子ハ麻のあつて織て屋簷藩の棟をう
とて考へて一夜も考へてつふかの男漢おへる子のをさして流る

る事ありて小神のて流るまでと化をさうりのおと用とて
どもこの地も用形ありてとてならん事ありてつひとて好後あり
らば米とやうにあつても勝りぬとてさういふ言はるるの扱あつ
人子送つててやするも初うとて夜といふより大なり子初て
つふこもやと家のあつてのさうき押あつて海山並谷子つら
はうも地もあつてやと押あつて初も足さきあつてあつて
拂子の夢も云遊びんとてあつて遊びもさういふ事とては
すあつて是ら後ゆんとてあつて後ゆつてさういふ事と
あつて次むさかりとてさういふ事とて終子塗あつてとてやつ
所帯の箴子云天下ハ一人のそつ子あつて民持合は天下あり
所帯も一人の所帯子あつて民持合は所帯ありて後を獨

二反ありてんと授すの媒とわづらきこゑありて刃家残失の
の憂を懐けり勞なく愛ひ形手射飲べし

○

世子文事も亦く善術も亦く及んであひはかる者の書きたる
感ありてさうかゝると僅すやとのとハ形手ゆのぞう一薄命の人
書きたるれ共すゞ感懐ありて難きとまうり鴨の書明ぐ才
記書用の善好がはあぐ筆をかひとたひハ善書しく世のあり
や及と懐けり身と願てさう人さあれぞ綴りさうそのごも何り難く
めでたし書きたるるむらりあやハよろづやうき子通せん
幼き子れゆて遊び子風操といふそのありこれあや何人のまこと
まうりありん登北くのがる射ハさうくだましく下さう射あ
ざるく端書しく

○

すつりある竿子子足と括とまておのれ動と替りお猿うか

こあり一花子の意とあふ人る一生の動形射とよく誦し
竿ハ業ありて獲ハ天地の百子ありて風を身と替りさうの氣
世子あり一人零落ありて人れゆとに初とさう子は北さう
市小也キキ 境急と愛ふ時世子ある人も境裡と愛さんといふ
善書居の人ハ境裡と愛りんとたがひ子ハ筆しが終子零落の
人子云様まじ 境裡と愛くゆりぬさて及すさうのやとさう
子世子ある人の云々ハるれゆと何とさく裡のうまきとすて
裡のうぬうぬと愛つるやとさく零落の人さうひて今日
そのまことよまおおハの幾志子やうるる形ハ裡子さう日裡
ハ心ゆとれどく常小美味哉食さうる人のさうく今日ひたあふ

三六

ハ盗人子奪ふとと数少あり仕務くく美披と若くぬる女ハ家
と犯せしむあひくく何れ情ますんばあまぐくす

信者の罪ゆり事には等子連の向合ありこれ申子五月夏不年
中仕ぬりおきこの向あり何れの大納言まめされて何れ乃

中よりあつあつの向れぬくも尋ねてこの何れなる村言猶果そのや
てあつあつの子何れはまを彼あつあつある村長此中たる向ありと

て口ましく何れの消息をひてきく家へも出づるそのあつあつ
多あつあつあつあつこのことゆゑとありかてくくこの村長はよく

へおで尋ねますすもあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
通しゆりまて村長云風流の面目重のうまても安元んてこのい

とありかてこれとあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
とありかてこれとあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

ありてきく尋ねあつあつ年中のあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ



○ 學問一々博多多識とあるも人情とあるて世為子新とある
 が為あり聖人賢者乃世話やまきあも言ありておあり頼せよと
 乃教子のあはれをば理不あきうあうとく人と信おと見下す
 ぶらうは清その信お此目より見れがまこと言傍ある若ハ角立てま
 て幸益お見ゆるれり君子の耐ううとあうううてよく信とあう
 ううううがやあ子信お子入まうれがれがやう信おあり學びの
 及ハ辨とあうままハ變形ううれが書籍ハ辨とあるの助けな
 ぶらう知りて表へあうはさげ隠ううう耐子つひあはほつら
 あう人さうお用ひさうあり
 人子覺忘せられたるおとあうとあひひあうううう久食す耐
 ハ外子さう言うう耐ありハ味ひうぬううううあとおまはあひひ

あうううう食ぶがああり言をもちうずして食するりの子うぬ
 ういありされが應食たまうぬまのあひあうさうあ子ありす
 づう食ハうぬうあうううのあうと形うその耐とあううう耐中お
 耐ううう口うあひさううううぬまおの何うううう雪披おハ生塔
 を流うう湯沸を山浦の味味よりもぬううううううああり
 初子畫まうううとくを信お人あまでも罵うおあお格別筆勢
 墨色すづうあ子あうとあうおあううう費せう勢ひうううび
 ううひすうとあううう
 予江戸子あまううう武甲山子あうて日本武尊の旧地とあ
 せんとあ山ううう人此まうううううともあをま書梅村あり御
 嶽山子登りありあのあうう水平此う平乃おつが意望多

○
武井古戰場とそらるる一とすは此江戸の人ありてりこの
あやうの産物なりとす

武井古戰場也子云武と出あり嶽此言き小孫して神威と水
平の初もああり文と繁民の際子やらげはと必家乃仁政
小孫あるむさうの必水嶽の山の叔倉子義と遠る返標有梅の
妻梅乃里もあは戸とさると十有云里あして初孫子山河梅
後あし妻梅村中金剛精舎古梅の梅あり四村実と結ひ
熟すまども縁のいろとさるるがあも妻梅の名あり東山西水
と免がうてされがう絶無子初より園巷とさると十町なり梅
梅とこれが後孫針ありて梅あり村屋小流れとさるとひか
たの初めとふ初日子むらふあるる一殿すれは多戸川の流れ

とさると山とありさるるたち石小むせぬ流れ乃昔谷子ひがきと
人のあはるるひとさるる如く山河すく業絆く救里此言あ
曲一岑子うま五谷子ありはさくは潤布さく小三知くさ
昔のあ乃雲あり山澤軍へては頂ま系雲のあくとさめ山岸崩
くはる子楠沢の名と砂一往古小戰場此初要たさも陰我
る叢林とありて種子山がらの惣孫とさるち雲係く竹意
累石礎と埋め月さびくうさく尾花白双のひくとあへ持
産風子ひも入りてお子白雲と霜一葉挑枝とされて丘子
結此系とさち初孫とさる子田園子うけ宝刀むきく梅の
中子ふらうを名子財と感すは舞乃榮華もあああり
あはるる月子むらとさめづるとさくは初孫子とこれる盛衰も紅

○

牡丹を肖柏西山子居られし時乃金と賊子奪たれノ費を山
 村の草庵まゝ業益とすりたる抄七千貫と盗人子にあり去
 られり衣被を金銀と衣被ととさる子奪少その形は在位
 の人の格おろしく世で控たるも人の華美の衣被と金銀と
 は儲ふべしす亦の調ふもあふまきやどハ土器と紙むりの
 ひきて海すづきとありたれ紙と付ぐん弟一此用さあるべし
 弥陀如来観世音菩薩勢至菩薩の之等ハたかど換お信
 すべきと弥陀をいふまゝもあく観音も何れもあつて信
 んされ侍まじと勢至なるハまやどお教すももがうも好く又
 勢至とあまする大伽藍ちあり勢至ハ切はもうけま菩薩
 やや経とえりこいふ人も希ありとお中たれりたれと人子た

三十一

○

とくまゝん子ハ美婦人の夢あまきとひとくまゝん又虎生縁の
 うすまゝの同座しるふゆ子生るる仕合セ不仕合セありいそんや
 今日の大夫子控とや
 一休禪師紫野小おをまゝとらう人此書どりとむるそのあまじや
 御利んと書てあゝぬあゝ他のこととむる若し御利
 んくとつとも書ひ又上子只この一字そん共御利んと
 セのあまもあつとやいとおりろくそれ後すづての事少うよ
 ひく義利とむ形り子乃金弟もまゝとそれ子あつひく御利乃
 二字と合せく一字お俵り書りそれ文子云
 名は兄まゝ忍少子教へ兼勿小又ハ思子ひとくまゝん
 又ハ思ふ子似たり

三十一

ろふ子妙術ありて金をつふふ妙ある事と足は多くいあり
金のため子已と勞し身とにす若少くはさあれが火木土水
これ四つのおおの妙とほそ金とほふ子拙しとおあゆ人
金をつふふと火とほふとく自在とほふものあふ生はるる
とあふるるす

遊樂を費あるも子あり費とをあげはるる一これ一厨を
益あるもの小あり益といふ財におあさささありありろき危
まこころ子ありの何やろきとぬれはれとろきとあり一若生ハ勞
と食より何の勞せはろきと食より不及ふを命を然と終る
ととほぐ一酒交と人身とおれど多くつるつと拙はつるをさるるもあ
換りささるる若生をさるる不及ふとさるる病を不善生子あ

子て世不氣と為れするその常子病おきふあり
酒の多むどの大酒あり痛飲ありて一膳しと精神とさる
むし財におして身と換するといふす碎く是が為子犯されんを
強るれおの女色子おあささるる夜子精神虚耗してん後残
破り癆渴胃中子酒痰とありて血及と腐敗す更く腎を
やがら子及ぶ

餅ハ言滞するその好り多く言はるるす餅ハ言滞したるを
救ふき術あり一只病とく一禍と出す此扉ありこれ一言
以て智ら一一言以て不智とす人の表形り人子おのいさるる
ハいさるるといふもさるる子おのいさるるといふもさるる表裏す
何子あるるお乃少きハ若久のことあり多くおとたくハ指を

禍と振き身と芳すまの妹形りされハ村宝多くとちく生渡
之く多々すハ只財宝の多うんとと好む者あり衣食お爲
志く村と持者只多くつるを生涯のたのこころく終り財
宝のよあ身命とにんかり欲少き人此目より見る所ハ友の事
の火とにんおのむく子と形す

○浪華の老松子持びて一ろ農家子で橋渡あり糖とお落すも
此子床九此如く一ろ割る舟と橋子あへ立てまるといふ具
何のむう一より何のむうお子やある古より

○折てる尺己き雨の橋のハ束穂ふされさうのこころ林ハ木子ろ
こあささあといふ村の初ははさうろろか老松子初る知りぬ
宇治本橋渡竹田あさうハ昔昔女多くあつてこころ形り古き

○洛陽乃地圖子小採娘所とのふところありて遊女所ありそのろ
ふ多く水辺子居たると古書子見るとありあきま舟此圖おども
おりひあをたて

○此田五半も海生家の豪家より平西芳ありて有るの湯何と
しつゆ極月此廿日ありかの五半と村のんとや一おあうり廿
九日のとあり家計は混雜は村おれども五半予と見えうりつ
あまきりうあひひけ形手抱るあつて座へまき橋にけりさき
のわがうり一予とるこころいひ出るとそのおをやく五半と
里よひのちどより酒會れりてありありて骨ハら分おあうり
ぬひくめでたくこが家より年とむる身よりこころおの明ぬる中
でそのがうりけりぬささる羊飼のうづーひとやすこころ一ひとて臥

暇とらうりあぢまのあうり 二石石さうりの有案あづぐと今
出れしによりくその後ハやううとそ良君ハ仁ふもあうり
くうぎととんやあぬ

河内の業先とりのころ子一年をど居る附幸あま後のみ
合ひのく及ま合子うとくうんとする附おひなる八日蓮ハ
藤飯と合うて法と造御地子すあ親書ハ裁の玉分子
ありて所敷の恩とあふ弘通の傍ハ身と抄下石上おおきそ藤
食ともいそん平ハあづぐの敷ともせ藤食子ほずしそ
らんこととあふのころざういと抄くん術乃あうり
まうり妙ひたり

紀伊の玉子名産之品あり 八代焼ハ代産柑合票ありこの中

合票の抄トあうり付る何糊あうり附とと法る飯ハ蒸菘と
かへてあぬ里く附る付ハあふること形しとあうり

藤珠の葉の括と黒焼あうり胡の油小抄たぐと
一金燈切り麻子あうり布どのとあても何あうり洗をば小愈ること
妙あり楠正成が家の法形して左海大折屋のあうり子信

子信が友中招強次第といふかのき根あうりて切れし付
ヤン子あうりの麻只この葉とつひく忽子全快せり

遊女所とくろ目といふた文字子止ハと書たり所謂孝悌忠信礼
義廉恥の乃と上らふり此名ありと云候ありヤれども遊女所
里とく中子ハ孝悌のしあ子うとせく年一けくハ主人子あうり法
久忠と書してそのあうり起しを信といふあけある客い

らひてやろ内んぞ抱うず慈態と推しつゝ新儀と云々やむる
附に子キ子ありやまむ何ぞ止ハといえんや実ハ嘘の真子ありう
かま女と云々も人情はうもくもくもハ二や小振衣のまねキを
いすめつゝもこれ設あまがあふち孝悌忠信あしとま
少登るゝす

○
繋ぐちの風色ハさうもいさる衣被調あまきさるもく
乃流りもあまのこちふくといさるのこびハあれと又さとの
さぬ子久かりされハ先子出やすあ人も度りやすキ中不と
あ居るべし烟草とあふのむり南唐より橙を傳へる家朝不
流形すまそほつゝび絶くあうりつゝやさび流りつゝ都鄙に
も子敬ふと好り火はるちあをりつゝ停止とあまたれご

上人不相

○
人情の好みやめづつてやろまきんも良きものことありぬ
それ以外のとやあありん流子落書あり
止たきハ公家のあし種キ力法師のたがえ伯乃匠者
平がいとけあま附中であ忍び控灯とつゝこれありつゝま人のお
用ふあひてお好むとせらるるお好むとせらるる控灯子習りつゝ
あまのこちもやつゝその事流形つゝ誰あつゝつゝ教とつげ
る者あつゝこれつゝ人子その人あつゝままのまき為の用をあり
こまされハ武家子限るつゝ旗子教と流形幕子教とつゝ
ハ流形と知つゝつゝああり農人町家もつゝ今ハ教ありつゝ
教のあつゝつゝあつゝより農夫南雲あつゝ子も教つゝあま
つあり羽織とつゝあつゝのハ流形あつゝ礼披子あつゝ孔子教とつゝ

つれも彩色ありて古法眼元信の茶といひ傳へりそのうきこの
 繪とけける画師一のち子宗居すまこと三年むらりの中子何ひと
 つあきまきとあく其茶とこのまき只それのて日毎乃二おこころく
 あるふこころくおぼびあましく子をやくこをそと種さう一ふた子茶
 とさうくともおまきいつ子もゆるざる若ふたとおひひくあまとき
 恒持のやきれなるはるの許畫とめり一家とあせりといひあくら
 茶とえりともあく田美子のて年月とるさるハソクあや
 衣衣食の費といふ子ハあねど何交へありこもあまびひもあ
 老も西用ありて茶へのありて子よりてハ一年も存茶せんもつり
 かくこつら子彼畫師きてそれこそつと名跡とてきとあか
 あまハ年束の思河子何うすの畫とのこまあらすつて

んがまへのまき又四五日やぐや子恒持を何とあぐこえく
 持も絶て茶とさるばある教小切まの恒持が居る子あけ
 茶のひさろ子やうくこ茶のひさるを祝きて茶師のありき
 茶とえりともあまきなるはやぐく小切ま子いふ子にれて茶師が居
 るとさるばあ子明り傳子の持板子身とよせておぼく此茶とえり
 茶起するありきとあまきなるは切まを引おせこころのぞくつら
 ずとやく固せまきなるの身も痛ふ入らうあまき茶師あ
 きた起きで一百ある傳子子あぐと見れがま固さる糖あり
 畫勢をれあま丹妻乃妙いづらうすやあま子又の扱はいら
 あまらうあま前のぞく扱もすく痛すくあけまばうやあま
 とやせんやあまあまかど扱り治ふやまきつてて固くぬれハ恒

雲萍雜誌

雲ハ評

雲萍雜誌卷之四

柳里恭 稿

○ 朝あさが布ぬいと裁きする日ひより芽かが片かたと待まちを子こと育そだつるおやのこ
 ろもくくやぶらうおまひあくる二ふた系けいよりいや葉は生せいいぐいと
 細こまやうゆる蔓つるの垣かき布ぬい子こをついであまいたけあき鬼おにのこころ
 とこののくたをそむるお似にと重かさつるやこころ葉はいよまきけりて
 この蔓つるかゆつる子こをひ被おほつるこの蔓つると巻まきてあくるふぶとく
 競まさやが如ごときを路みちあまむつるののを葉はのするさるあり何なにも巻まき
 らんとする力のけ手てとどうて引ひあがるヤや子こあがと縋す子こも巧たくめる
 そのとやそれハはその日ひく子こ色いろくくおのがあが子こ深ふかか
 て風かぜ子こ興おきるの動うごくとすむるにそあがは志こころの先まれそ明あ

初はつむと霧きりと言いたさるるよ吹か風かぜ子こと女めまきおのけ子こおまお
 つずかう一ひとがせがあらこれこのそ乃の秀ひでとけく帯おビも海うみ
 やさすづく君きみ臣おんおろくく父ちち子こおあをれこ夫婦ふうふおあつひ
 兄弟あにいもうとおたすけ朋友ともおあきくま子こひくく人の世よ子こあるもこ
 星ほしの如ごとくその向むかひとてと那なこあバヤろうもいとふぐく久ひさくく
 めくおまき子こ起おきいぐあめれ腰こしとあぐさき侍さむらいぬ
 酒さけ教しゆ子こいそとたを味あじひあく者もの教しゆ子こおあぐとまきも美うまき
 那なく烟かえり草くさ教しゆやくお皮かわふこ手てハあぐとせしぐ茶ちや教しゆ碗わん子こおあふ
 こ手てハ香かぐくくく
 一ひとかり一ひと時ときと忘わすれく言い好このくあめこれ多おほき林あきのやま猿さる
 平ひらぐは子こふくくく一ひと親おやくく文ふみもあわくく親おやあくく親おやあくく約やくと

結むすむんこととむまが謀まがくく存のぞ子こるれ志こころくと見みばや
 こある時とき食く容よう五人ごにん残のこ者もの少すく小せう賄わいの事こと薄うすくバ一人ひとり子こ美うま金かね
 西さい女めとあて二十にじゅう五ご女め貸かく一ひとりれこの人ひと子こ乞こくまむいと
 安やすきとぬりこくく三さんづうう持もちきく貸かく子こ母はは案あんの末すえ乃の債せま
 通とほ本ほんが又また二十にじゅう五ご女め貸かく一ひとり子こ先さき子こ貸かく一ひとりうとともい
 をてこさびとめて来きり貸かく一ひとり子こるれおとせとせとるつれ
 だもこがぬのとハ少すくくもいとあ子こをぬるんも形かたちくいよ
 親おやくく支しつまらう子こその人ひとをうけ福ふくありく多おほくのあが
 ぬ入いるこ何なにれども少すくくも色いろ子こ出でさうけさその妻さい夫ふ子こ
 云い々々も女め十じゅう女めのこがぬとありく七しちとせとるふ返かへさるハ欺あぶま
 奪うばせんそとつあ子こ吾われとよ彼かの人ひと平ひらとあざむくんあくく一ひと

まがやえ返さるあり 刻致内 支情ハ婦女子の知まるとこ
ろ子あらず やさび此よりといま 夫婦の縁と絶つといま
どやまどこの好妻もいまだあまねとつるをれとある人來
ましく予子告れハ平ハその名と名をうて返さると乃能
はざると何本ハ告ぐる人まは彼愛子より予がいつて我
その人子うたるとにこれ人こつと云々ハ人ハ不實とあり
こくこれ支りと絶するハ知色親友といふ子ハあらず欺くも
不實とこのおろし此是飛あましく世子始めあり 詐偽と
うあつと人子交なる輩ハあつとこれよりと何げむくとを
許さまど知色親友といふべくんはこく予子初子こつと云々よ
しこのことまきてよりも傍りたる美言の穢もゆるぬハ妻は

たつちとこの人子返して予ハこれ許と試しとてまん
厚く交さるぬ
情懸あつと主人子忠とあつと慈懸何と親不孝といふハ誰も
為すづきとつとどことめとあつと予をまきとよこそ慈之れま主人
慈懸あまき父母といふもの世子ありとも慈懸ねどさハ何れま
人より下るれんやありひやるやどのおさけも抑く書父親母と
あつと人子産の子とさつと慈懸あまきひとまたえさかき不
しとあつとさるべしとゆる人乃ん子ハ存人ハ威とあり 自在子
居休んつきそのとゆるハつか身とつらうと形なまハ人の痛
いと身人さる世事本月れあまき 獨念息子あまきその乃 不人情
あつて研子うけまき 法力の如く磨るやねる後子ひとく

うぐー人とあはれ其とすもま主候子仁忠候より親子子賢
孝とさわか見才也敬とどき夫婦業和とのひ朋友は美
のめんごうと深うくありて存子人の今も昔候ありく
てご一切有情の物此可とありく善教と異好る天下は美子
るぐーはくくありふ子その美和乃美く人古より世子意を
残す子悪事ハ推との然美多く善事ハ必佳れ念とのこを
名候と稱あり口をくをさくく又海ありきこと小あ
らげや 善事ニシテ子ト云ハ知ラズニシテ 昔ヨリ名タル善事
難波の野外子的人とのふ那業仕あり裸あり夜とさく出とこ
の愛とぬひおと自らか後子指さく言り九と比こく鉄
砲とくせく美言とありくわけろくく一はく子業人おがと

こふ一途とあてども飛雪の如く身とらく九と廻る小あ
るどの経てあうくくをさのころ世上は号とさうくさて
砲術此師範する善何業とのふありその術乃すかれたるを
りく門才百有餘人あり何く門人來り集り其子
おがくこれあま子的人の術を感ドくくあやしきこと乃哉
あはれくハあまが善乃のきんぬくく師子清ひくこれ
くあてをそれとく少子師を此事を愛くより色候とあり
云ひるふ心鏡乃大術と傳人あゆるそのくさやこれ那業仕
とあへるすあまくく平が善等の法子とあり乃り無益乃
殺せしめられつたぐと門人を諭せくくおのく神もくけ引
すのふ師の作せくくくく世子とくく業と為次第

せむらう乃まぶ人乃云乃まむすす牙子形乃まぶ乃
里の人あを依枯のんあぶくあといひくうあある時悪
傍乃あを出奔したる恒持ハおどろきつて人といくあうこ
ホのあむれども初めの知れざる乃まぶ人集あう何う夫子
おとやあくと穿鑿すまよおろく子四女日あかく形母
子構舎子ありくう乃まぶ八十あを恒持が手袋子入おろか
又くざる乃れバミおくおどろき扱を思法師が志日あ
まをく大勢手己けく初方と尋くするま恒持さめり云
けくあ彼れ一金と持く初くうん子ハ空をや尋ぬる子及む
ずられまき子人といく求め志むるあ空落して掃へ出かバ
まをく石舟あうくめと海濱ともあえつうくくくとたを



ひー也ああり己子の移あといふ黄金と持初あまきあ
て困里ぬるともあまぬブルまバくくする中ゾゴこつろあを
あすす此事只ひろく子といく尋ぬるとあぶくくんと
く存わ初あをいささばありぬ
むくあまあの中あ経慮いんくあく揃子出くあ
子暴風砂と吹く子入れまうびざりせぐして食おあ研
ありとく結仕北軍とあまぞけあぐ一只瀧ひ媚ぬる換せ
容く忠ある屋下と換あると救多ありくあある附しあ
てんやつらざるん解乃あつお此中子初むくの何りなを
五出して種の上子裁おきやされるるるる藤畧乃調
理しん若いさあといくあをきんる一庵丁の若あハ切飯中

つくべきありとありはまご料理せしそのハ切しれあり
とぞ飲食のあり子人と失ふことんありきてとあざり果
の昭明を子を飯中お籠の死しきあがりて著せし
元出給仕此輩子んせと種敷のふり子隠さましとぞい
こありぐくまきとがもあり

○
平が系家のもこ子ころくと安や青終日やまぐいり形も
のひびき子やと意と推しこまを付し老さうむん
翁此眼がぬとけて造の上子石白の目と切りて居るそ
翁子同ふ石白の目と切るとそ此数日子幾むくぞ翁こ
つ云切も白もあり切らざる日とありこのふ又同ふ老翁
いくむをぞやこらんそ今年七十一ありあま同子孫ありや

○
養て云娘ありとやく婿とむらん孫三人あり平言く已
お娘あり婿ありが老翁うら業ハセんと何れもあん孫の
云家子六人の色をひすも婿一人の傷あり他子泣る
の輩ありこれ白の目と切らるとも活計と補ふべき乃老翁
子とすすどらんども欠伸のこ子泣に光陰と送らんありハセ
めくも鼻紙の料とをたすけやとくろあがふき業と
もあつるさ夫ひぬ人の親れ子とおひめがこ言事も候
きも吳あるとてお手いと何りかこまそのとらあひぬ
おね又お師長年ハその父嚴ありと教刑此届たる人か
まおさか遊びのすどらう色見ら子契約せしとハ平く書
て忘るるとれくある附半と引くる量の唄あぐとひを

里乃れハ本年もあつと追ひ新まきくつふふと呼ぶ子ハ三つふふ
毎とその牛子のせき川端中まで新うくとつふ子重うけか
ひまあやうふ所身と棄せきく新づきが貸子ハ何とらと
ちまうとて之が本年ハつらあつらとて門子生うと新と
持さして何處の持ありともその身が重くも但すてとて
や北さつらよ重うらうとてひく本年と川端まで棄せ新
うらその新とせかやいとてひくらの男重と伴ひ本年が
又子ありて本年が父子むうひとてせあけやくとてとお
かうらよまどが本年幼人の裁あれどもうの重ハこれと珠と
んは牛子のせきと重とちまうといふ子ハ新くも肯せず
つらせんといが本年が父これと重くよらよらもあつらと約

束おせし子たがひあくち切うせききらすアとて重ふ
聖手セ門あある大梅の松と松子命とて切うせ半飼子
とらうせたり重人のこまをといつて人名あが約束の招と呼て
今子もあつてつら

○
昔新着の重とて人料理の重とてくつらとて重とて重とて
海の子重なりある重司あつらとて重流重とて重平が件
子重とて二と重とてと送れら子あり所家不恒居する
とて重とてこれおとてむとて重とて先持佛とて重とて日重
の重像ありとて重とて重とて重とて又法然の重像ありとて我
又て重とて重とて重とて重とて重とて重とて重とて重とて重とて
おとらとて重とて重とて重とて重とて重とて重とて重とて重とて重とて

ともあり候へこの二裡此中子く價乃下並あるを嘗て
その方の宗首とありんとおのりつとて人をおりうとらざる
おとろろ手と志あり

○
比叡の山ある飯室名の和祥院子ひらの老爺あり坂
本乃産まき農夫の子形りなう父母子おれて十四歳
の時より一花子住居し今年九十六歳ありとて予其者
子ありて其の耳目健ありて歯牙うけとておあり白髪
ありて骨ありいとたくぬく老く力あり他いど他い
おと食を食ふへいづる子ハ飯と揃りて擧子はけ君常の人
乃為る二日此用とひと日ふ是くをどりくはちまひあり
てふふさる人といとをりて仕ひなう子隠ま三百貫目乃借

材ありて移轉すを何と云ふとてゆく歎き乃ハ老爺曰く
ひあがう子ありに今二とを幸抱し一ぬらうしは働きてそ
の借材とつくのひすぬく移轉させやうと云はれまは乃
うちお何と云ふやとささくおのりて老人の討あまはたの
とひひむらう子まきまのやとるきくくくして年月と送
里まきが此老爺をれよりく不毛の地子ハおを裁まき山林
の下等と刈てま布子賣りおを繩子ひ造と織りあるハ人
此為子産れく一登お寝食と忘らうとらう傷き乃まきと
せううちふ三百貫目乃借材とすぬせ院まきと老爺子移轉さ
きたり院ま移轉の時ハ老爺が傷きの差大あるとゆせん
為子借ひめて安居させくこすおれとてはらうハ此山子

ハ十年も恒あれし事だ他へ移るの志ありあつて終つて
ず好うぬその好院を多く此所おと贈りこれども少くも交
際し云々も院主八人と通るすその役ありおれをまが
教化しつゝおれを材と積りてこも人の教化も出来ざる
お不用の材ありて益あり材の利八人子ありて不用の者
子つぎおあり身と終るも食料もあつた何と云ふ
餘と求むべき事なく又好恒あつておもこも子終るへ
と云ふ

○
お妙子の体系も業子つぎぬ人子て古人の糟粕と
めざる力の好り事とこもお渚子ありたるころ業具おの
か好むところとあつらへて諸家の法則子つぎすすりて嘉

乃家と起しおれと妙子体系子つぎ料理すことと好
むつゝ姐抜子あり料理して酒肴とつゝのひ又おて
と云々も業子と客とつゝのにおとてあつておれ
こつゝもやうハ今今そのゆと建の働と云々も業子
お昌せりお一人のおおふおれ業人おねとつゝおれ
と云々も業子と客とつゝのにおとてあつておれ
おのの味子ハおれとつゝのにおとてあつておれ
ハ弟が客ありておれとつゝのにおとてあつておれ
たが家おれとつゝのにおとてあつておれ
その目他おれとつゝのにおとてあつておれ
たつ今家諸おれとつゝのにおとてあつておれ

日と夜との日ハ家子りくふく遊び日ハ他の人移す形
遊び方遊山戯場ハ正とよき遊里とよきも善あかき主人
が慰むやど此正ハ幸今人ハも慰ませぬす若ハ忽て又と
清くまたが保あふおほはまやく人と立て合家せしめ
てつとめて意々ざれば家子身と換すものともぐうあく本家
おんく繁榮してそお不家業さうんあり休孫のまへと際
居せりしにひひ判ありそ家子出そ何業の大納言子
そいめてまたそあめりそく財用のとすそく存子そめく
おろく此序大納言の作せりそそその評亦そよま
ろくそやとありそまそ左折のそつめぶゆげけつとそを
又作らるそ子ハ凡大衆とちるもの文の及子志し存皇風

流のおもひうらざれがよろづうくかみそくおろき形
し備身齊家の乃ハあつぐうち不堅固と海へざれ人おづ
まづそそその人そありそ風雅乃ん絶そあくこのむ子生
まてそそ一首そよむとそ知しぬハ声かきそと辭終そ
あそそ筆子飼ぬそ子ひとそそ美そそそ構そ家乃
あそそこのひもあそそあそそ休孫証づんそと生てやそ
大納言と師範そそ誦づそあそ多そ中子そそあそそ下
そそそ
おとそ月も沸そまあそそとたれそあそその子そそん
此身人の幸若とそえ思ぶの意とそとあそそ時古今あそ
集の序子そそそそそ評そそそそそあそそ此身子履

ちぎりと飛傍し〜商人のよき衣着〜また〜と〜と又〜
 然とせらるきり身の人とせらるこれより〜〜生活身も
 肌着と〜とせらる彼とま〜〜猪と〜〜おそれ〜〜と
 ぞ家内此妻子〜ありま〜びとのすゑ〜中〜も衣被
 の制と嚴し〜お〜〜あたり蒲團〜古と名
 ひ〜綾羅袴袴の類を〜あ〜もこれおき〜すて
 本絨の〜あ〜て一家絨布と〜とあ〜この家子刺繻の
 箇条あり

一商人〜身分ま〜美あ〜も袴の類と美す〜〜た
 令家の者たりとも控子宵〜その名身帯暖簾五あげの

上戸家業お成や万歳事

本家お続人様

平が産と敷〜〜曉山と〜ふ若者歴〜お〜信濃子妻と
 ことめ善光寺の通子世帯〜烟子と高ふ〜と家業とせ
 しがは〜乃家子て善妻の粉と捨〜弛き〜子好お
 あり〜〜あ〜〜食々れが給仕する〜そのそれ大食小無ド
 てあ〜〜ハ出すと扱の〜〜〜〜食〜ヤそ飽ぬるこ
 こと〜〜も新耳も〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
 たる〜〜宵中〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
 一〜それ〜〜送り食ふ〜〜〜給仕のそれと〜〜
 こと〜〜たるの控へ食ひ〜〜〜〜〜〜〜給仕の者

ハ湯を汲み来ると云ぬるひま小梳と持行こびを山の如
盛あげ是限をくすむる子止事と傳ずお湯をこくむ
ハコトコトみく揚うけ居るハ給仕此来らざるや子掃のトへ
粟あつて投入れ食を伴子わきおさんとせと蕎麦摺の
梳のそ子ひくと清きぬるハおもそぶ碗と掃のトへ投入
こまバあつて客方いづづきやうもあつてありあめ杖をど子
てうき掃く尋ぬれどまやま子ゆると形ハ事のよりあり
らさぬ子こびくぬるぬとぞお食ふあもやど乃あつてくあ
るあを限りあつて
熊谷水命入るく周東へ下向せりおろく一人をい海より
美濃へ越ゆる山中子て盗賊二人お好と支つて海浪衣被と

こまバあつて客方いづづきやうもあつてありあめ杖をど子
てうき掃く尋ぬれどまやま子ゆると形ハ事のよりあり
らさぬ子こびくぬるぬとぞお食ふあもやど乃あつてくあ
るあを限りあつて
熊谷水命入るく周東へ下向せりおろく一人をい海より
美濃へ越ゆる山中子て盗賊二人お好と支つて海浪衣被と
こまバあつて客方いづづきやうもあつてありあめ杖をど子
てうき掃く尋ぬれどまやま子ゆると形ハ事のよりあり
らさぬ子こびくぬるぬとぞお食ふあもやど乃あつてくあ
るあを限りあつて
熊谷水命入るく周東へ下向せりおろく一人をい海より
美濃へ越ゆる山中子て盗賊二人お好と支つて海浪衣被と
こまバあつて客方いづづきやうもあつてありあめ杖をど子
てうき掃く尋ぬれどまやま子ゆると形ハ事のよりあり
らさぬ子こびくぬるぬとぞお食ふあもやど乃あつてくあ
るあを限りあつて
熊谷水命入るく周東へ下向せりおろく一人をい海より
美濃へ越ゆる山中子て盗賊二人お好と支つて海浪衣被と

二子よりしてあつるの者あつた妻の子化名して神のうらみまひ
 なるこれ妻おのれが子かたれが甥と善子らうつれども神とあ
 うひよりうらみ終言とらふく甥と色けくとも此
 甥おのれと神とすくくそ神もせく母が家子うらうは
 んまつて入受てさうま子とあづきりのうらみあつたその家つ
 ひ子強子らうこの妻善子とあつた神のうらみせはそれ家
 あづきうらみとんとあまあまのあま強子あひひくう
 うらみおひ世子うらみと多うらみ

鴨の長明子あつたうらみとあつたあつた人化名とあつた
 ちうと二神のまもあつたす山田子うらみとあつた安山子とあつた
 とあつたうらみとあつたうらみとあつたうらみとあつたうらみとあつた

かんとうとあつたうらみとあつたうらみとあつたうらみとあつた
 一おのれがうらみと神化子あつたうらみとあつたうらみとあつた
 二おのれがうらみと神化子あつたうらみとあつたうらみとあつた
 三おのれがうらみと神化子あつたうらみとあつたうらみとあつた
 四おのれがうらみと神化子あつたうらみとあつたうらみとあつた
 五おのれがうらみと神化子あつたうらみとあつたうらみとあつた
 六おのれがうらみと神化子あつたうらみとあつたうらみとあつた
 七おのれがうらみと神化子あつたうらみとあつたうらみとあつた
 八おのれがうらみと神化子あつたうらみとあつたうらみとあつた
 九おのれがうらみと神化子あつたうらみとあつたうらみとあつた
 十おのれがうらみと神化子あつたうらみとあつたうらみとあつた

いづろくそこのころと尋ねんまふ只程が拙める穴のこま
 ころりあまると日初て見物ふまうして人家ハ絶ておろ
 一地形ノ左平ハ民ハ鼓振すあど古語まことハ振つてハ
 めでたきこあ〜子や

聖澤雜誌卷之四大尾

天保十三年寅十二月官許
 同 十四年卯五月刻成發行

鶴谷栄次郎技合

東都書林
 本所橋五丁目 伊勢屋 藤七
 下谷御成道 英屋文藏

東洋書林
東洋書林
東洋書林
東洋書林
東洋書林

東洋書林

同 十四年
天曆十三年



東洋書林

